

## はせがみ 馳上遺跡（第4次）

遺跡番号 202-560・202-562 / 米沢市遺跡番号 353・354  
 調査回数 第4次  
 所在地 米沢市大字川井字元立・道下  
 北緯・東経 北緯 37 度 55 分 24 秒・東経 140 度 8 分 6 秒  
 調査委託者 国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所  
 起因事業 東北中央自動車道（米沢～米沢北間）  
 調査面積 2,150 ㎡  
 受託期間 平成 24 年 4 月 6 日～平成 25 年 3 月 29 日  
 現地調査 平成 24 年 5 月 30 日～11 月 16 日  
 調査担当者 草野潤平（現場責任者）・山木巧・佐藤智幸  
 調査協力 東日本高速道路株式会社東北支社山形工事事務所・米沢市教育委員会・置賜教育事務所  
 遺跡種別 集落跡  
 時代 奈良時代・平安時代・中世  
 遺構 竪穴住居跡・掘立柱建物跡・溝跡・畝跡・土坑・柱穴・流路跡  
 遺物 土師器・須恵器・土製品・陶器・古銭（文化財認定箱数：5 箱）



遺跡位置図（1 : 50,000）

### 調査の概要

馳上遺跡は、最上川の支流である羽黒川右岸の後背湿地上に立地する集落遺跡である。これまでの調査で、古墳時代と奈良・平安時代を中心とする生活の痕跡が確認され、北側には中世に属する遺構も少数ながら見ついている。とくに大型の建物跡が多く存在することや、硯・墨書土器など特徴的な遺物の出土から、古代の役所に関連する遺跡の可能性など、一般的な農耕集落とは異なる拠点的な性格を持つ集落と考えられる。

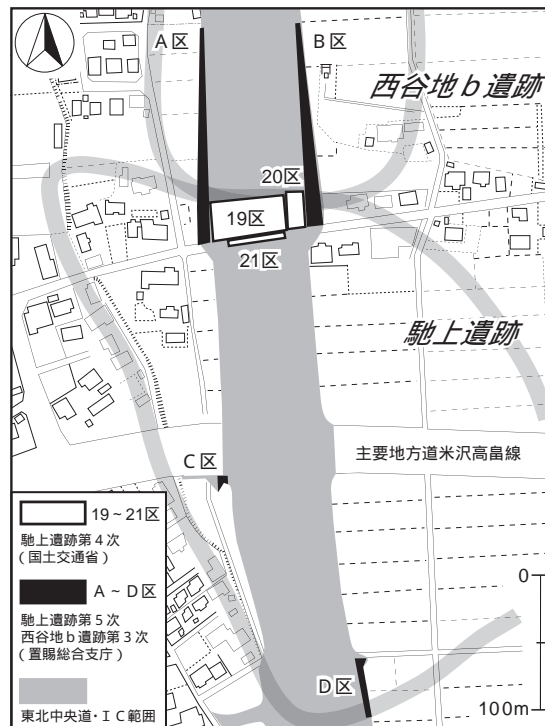


図1 平成 24 年度調査区概要図（1 : 5,000）

今年度の調査区は、平成 12 年度と平成 21・22 年度に実施した馳上遺跡第 1～3 次調査区（南側）と平成 21・22 年度に実施した西谷地 b 遺跡第 1・2 次調査区

(北側)に挟まれた位置にあり、既設の用水路・水道管を避けて19～21区を設定した(図1)。

#### 遺構と遺物

調査では竪穴住居跡1棟・掘立柱建物跡2棟のほか、溝跡・土坑・柱穴などが検出された。主要な遺構・遺物は、調査面積の最も大きい19区に集中する(写真1)。

19区の中央付近で確認された竪穴住居跡は一辺約5.5mを測り、南東方向に煙道が伸びる。住居跡の覆土は浅く、床面上にカマドの構築材料と考えられる粘土が散乱していたことから、上方が大きく削られるなど後世の攪乱が著しいものと判断される(写真2)。攪乱を免れて出土した土師器高坏や、底面に木葉痕のある土師器鉢などの特徴から、8世紀前半に位置づけられる。

調査区内では大小多数の柱穴が検出されたが、調査時点で認識できた掘立柱建物跡として、竪穴住居跡の北側に桁行2間×梁行1間、19区西側に桁行3間×梁行1間の側柱建物跡がそれぞれ認められる。とくに19区西側の側柱建物跡は、柱穴の直径・深さが70cmほどで、

奈良・平安時代に建てられたものと考えられる。

中世以降に帰属するものでは、永楽通寶<sup>えいらくつうほう</sup>など複数種の古銭が出土した土坑や、東西方向に並行して走る4条の溝跡などが挙げられるが、総じて遺物の出土量は少ない。

20区では南北方向に走る溝跡1条を検出し、これより東側には多数の柱穴が認められた(写真3)。溝跡で区画された中世の屋敷地を構成するものと考えられる。

調査範囲の狭い21区では、遺構の広がりについて断片的な情報を得るにとどまったが、北東方向に伸びる溝跡や土坑のほかは小規模な柱穴が多く認められ、19区とおおむね同様な状況であった(写真4)。

#### まとめ

今回の調査で馳上遺跡北端の様相が明らかとなり、北側の西谷地b遺跡と密接な関係をもつことがあらためて確認できた。出土遺物については過年度分を含め詳細な整理・検討が必要であり、遺構分布の濃淡や時期的変遷、エリアごとの性格の違いなど、両遺跡を包括した集落全体の展開過程に迫ることが今後の課題である。



写真1 19区全景(東から)



写真2 竪穴住居跡の床面検出状況(南東から)



写真3 20区全景(北から)



写真4 21区全景(西から)